

第3章. 世界の在り方の適切な認識へ

私たち人間は、多くの現象群で構成される環境の中で生きており、その環境の中で様々な現象を知覚している。こうした環境こそが、私たち人間が生きる世界である。そして人間は、現象を介してこうした世界とつながっている。これが第2章で論じてきたことである。

世界の中であって、私たちは様々な現象を知覚する。さらに、知覚した諸現象を通して何らかの事を認識する。一体どのようにして、何を認識するのであろうか。それについて色々な側面から考えてみる。

現象に惑わされずに本質を掴みにいけ、とはよく使われるフレーズである。この言葉はいかにももっともらしく響く。表面的なことに囚われていては本当のことが判らなくなる、といった風に解釈できるからだ。

ところが、よく考えてみるとこのフレーズが怪しいこと気付く。まず第一に、本質とはどういうものであるかが不明瞭である。また、本質とは私たちの前に何らかの姿を伴って現れるもののように聞こえる。目の前に現れている現象には真でないものが含まれており、それに惑わされなければ本質の姿が見えるはずだ、と言っているようにも聞こえる。そんなことは有り得ないのに。

私たちの認識は現象の知覚の上に成り立っている。現象が人間を惑わすものではなく、人間の認識の基盤を成すものであることは明らかだ。本質とは現象の知覚の上に成り立つ認識を経てこそ掴むことができるものであり、直接知覚することはできないと受け止めるのが適切だろう。人間が知覚できるのは現象のみであり、現象は決して人間を惑わすものではない。

では、本質とはどのようなものとして受け止められるだろうか。科学的真理と呼ばれるものの発見を対象に考えてみる。

現代においては、物質の根源と受け止められるのは素粒子である。その素粒子のことに考えを巡らしてみよう。「素粒子を見たことがあるか」と問われて、「はい、あります」と答えられる人はいない。

素粒子とまではいかなくても α 線、 β 線、 γ 線などの放射線でもそうだ。これらを直接見た人はいない。これらは霧箱や乾板が感光して跡を残すという現象が知覚できるから、その存在が確認される。 α 線などの放射線が本質であり、霧箱や乾板の残された跡は現象なのである。

素粒子についても同様のことが言える。最近の著名な事例はニュートリノだ。理論上ではそれが存在しているという仮説が既に導き出されていた。物理学者の小柴博士は、スーパーカミオカンデにニュートリノが突入した時起きる変化をキャッチし、ニュートリノの存在を検証し、ノーベル賞を受賞した。スーパーカミオカンデに起こった変化は現象であり、ニュートリノが本質である。

今では本質と認められる多くの科学的法則についても同様なことが言える。次のような項目について考えてみよう。

・ニュートン力学の万有引力 ・湯川理論の中間子 ・ダーウィンの自然選択

これらの項目は本質だと認められている。そしてこの本質を把握しようとして、多くの自然観察、思考実験、実地実験が行われ、多くの現象が知覚された。これらの現象の知覚が本質を掴むことにつながった。

その他の学問、即ち、経済学の諸理論、考古学や歴史学の結論、などについても考えてみよう。現象と本質との間の同様な関係が見えてくるはずだ。

アダム・スミスが“神の見えざる手”と呼んだものは法則である。生産という人々の行動、利益を獲得しようとする人々の行動、欲しいものを安価で入手しようとする人々の行動、といったものが、現象として知覚される。知覚されたこれらの多くの現象群の中から法則が見出された。それが本質と認められる“神の見えざる手”だ。

マルクスの生産価格論も、同様の現象の集まりの中に見出されるものとして説明されている。すなわち、本質として認知されている法則とか理論は、私たちが知覚する多くの現象群を基盤としていると言えるのだ。

以上に紹介した事例が示しているように、現象の知覚を通してのみ本質は掴むことができる。しかし、現象の知覚イコール本質の把握ではないことは、直感的に理解できるだろう。現象の知覚と本質との間をつなぐ何ものかが存在することは明確だ。それは一体どんなものなのだろうか。

これまでの展開の中にも見える通り、現象は一つ一つが独立して存在するのではない。同じ時間帯に発生している現象は同時性を持っているし、同じ場で起こっている現象は空間を共有している。

その他にも、因果関係にある現象、同一人の目に映る現象、同じ場での時の流れの中で現れたり消えたりする現象、などがある。現象は常に複数で発生しており、一つの現象に限定してそれを理解しても、そこで何が起きているかを知ることはできない。

現象が常に複数で発生しているということは、現象群を対象として考える必要があることを示している。現象群の在り方が伝えていることは、一つ一つの現象を理解してそれを機械的に総合するのでは知ることができない何かがある、ということだ。現象群は、一つ一つの現象を超えた意味を伝えようとしているのだ。あたかも文章が一つ一つの単語を超えた意味を伝えているように。

現象群が伝えようとしている意味、現象群が文章のような構成の下で表現している意味、私たちはこれを掴みにいかなければならないのだ。そして、この意味こそが本質と呼ばれるに相応しい。本質とか真理と呼ばれるものは、現象群が表現している意味に他ならない。

こうした考察を踏まえて見えてくることは、本質を掴むための思考と行動とはどういうものか、ということである。本質という曖昧な言葉を使わずに、もっと適切な表現をすれば、世界を適切に認識するための思考と行動とはどういうものか、ということである。

それは、次の2項目と言える。

- 1) 起こっている現象を漏らすことなく知覚すること
- 2) 知覚した現象群が全体として表現している意味を掴みにいくこと

1)は情報の収集と整理、現象の観察と記述、実験とその結果の記述、といったことである。2)は整理された情報、現象の観察記録、実験の記録、といったものの集合が何を表現しているのかを読み取ることである。

こうしたことに必要なことは、これまでも随所で述べてきた通り、先ずは常識や既存の思考の枠組みを一旦脇に置いて、現象に直接向き合うことである。

現象群が表現している意味を掴んだ結果として、先ず生まれてくるのが仮説である。この仮説は検証する必要がある。検証のために行うことは、さらなる現象の知覚と世界への働きかけだ。働きかけに対しては反応や変化が現れる。これも現象として知覚する。

こうして新たに知覚した現象を既に得ている現象に加え、現象群が表現している新たな意味を掴みにいく。この新たな意味が仮説と合えば、世界を適切に認識したと判断する。合わなければ、新たな仮説を立てて検証行動を繰り返す。

以上に説明してきたような姿勢を持って現象を知覚し、現象群が表現する意味を掴みにいくという行動を積み重ねることこそが、私たち人間が生きる世界の在り方を適切に認識することへと導くのである。